社会起業家・五代五兵衛と私立大阪盲唖院

――松下幸之助のレファレント・パーソンとして

渡邊祐介

序――レファレント・パーソン論から企業家精神の継承を考える

五代五兵衛は盲目の身でありながら一代で資産を築き、明治三十三（一九〇〇）年、盲唖者教育のために私財を投じて大阪盲唖院を設立した立志伝中の人物である。今でいう社会起業家の嚆矢といってよいだろう。五代五兵衛は松下幸之助が少年期に奉公生活を送った五代自転車商会の主人音吉の兄であり、また大阪盲唖院には五代の会計兼秘書として幸之助の父政楠が職を得ていたという機縁があった。本稿はその五代五兵衛（以下、五兵衛）の事績、とくに大阪盲唖院創設の経緯を検討し、人間性も含めて松下幸之助（以下、幸之助）におけるレファレント・パーソンとしての役割を論じたい。

写真①　五代五兵衛　出典：大阪市立聾学校ＨＰ

その前にレファレント・パーソン論の概要についてふれておこう。レファレント・パーソンとは、社会心理学者の浜口恵俊が昭和四十九（一九七四）年に提示した、〝企業家、有識者の人生行路の転機に際して、進むべき道を教示し、また実際に援助・斡旋を行うような、当人にとって非常に重要な働きをした人物〟を意味する。[1] 浜口は日本経済新聞に連載されている『私の履歴書』を資料として、個人のキャリア形成を対人関係の視点から眺め直し、いわゆる〝縁〟の重要性を帰納的に検証しようとした。

浜口は、対人関係によって浮き彫りにされた経歴を「社会的経歴」と呼び、『私の履歴書』に登場した人物約二七〇人について分析した。そこで浜口は、人間関係によって経歴が左右される「間人型」社会的経歴と、人間関係の影響を受けず自らの意思でキャリアを志向する「個人型」社会的経歴の二種類があると仮定し、どちらのケースが多いか分類を試みた。そして、『私の履歴書』の分類では間人型が

圧倒的多数を占めたことから、浜口は自らの日本人論の核論として、日本社会においては人と人との間柄を重んずる「間人主義」の価値観が相対的に強いと主張した。[2]

本稿では、幸之助のキャリア形成について浜口のいう「間人型」的かどうかという点に縛られるつもりはない。

浜口はレファレンント・パーソンの役割を、①スポンサーとして、②進路指導者として、③スター（憧れの存在）として、④予言者として、⑤キャリア・ティーチャーとして、⑥時代の代弁者として、の六つにあると提示している。[3] 筆者はそれらに加えて、企業家として企業家精神の継承、経営哲学の類似性といった面も重視したい。

幸之助と五兵衛はともに実業人である一方、事業の成功を見たあとは社会起業家的活動に乗り出したという共通項が考えられるからである。

Ⅰ　五代兄弟と幸之助

五代音吉夫妻

レファレント・パーソンについて浜口は三種類の属性があると規定している。

一つは、日頃のつき合いの中で絶えず依存し、その人の示唆・配慮斡旋・推挙を全面的に受け入れて、自分の進路を定める働きを示した〝他者〟。二つは、当人のモラル・キャリアに大きな影響力をもつ経歴上の先生。浜口の解説を引用すれば、「生き方や理想に関して当人がその人から感化を受け、その教示を実践・実現しようとして人生を展開する場合、表面化しない〝他者〟ではあっても、その効力は大きい」という。三つめは、物的支援を含むスポンサーとしての〝他者〟である。[4]

幸之助のレファレント・パーソンを考える上で貴重な文献がある。昭和五十八（一九八三）年刊行の『折々の記』である。[5] 本書は、幸之助が人生で出会った二〇人の思い出を綴ったものであり、まえがきに、「ぼくが受けた恩恵のなかには、ある人に出会って、その人の言動から直接間接にいろいろと教えられたということが、いわば数限りなくあります。人生の折々に多くの人と出会い、さまざまな指導や助言、協力をいただいたことが、今日のぼくをあらしめている、という気がするのです」[6]と述べていることから、本書にあげた二〇人は自ら説くところのレファレント・パーソンともいえよう。

その中で、五兵衛は五代音吉夫妻に次いで二番めにあげられている。筆頭に挙げられた五代音吉は、幸之助が長らく奉公した自転車店の主人である。大阪に出てきた当初、奉公したのは火鉢店であったが、商売の都合で店が閉められることになった。その際、幸之助は火鉢店の親方の紹介によって船場堺筋（せんばさかいすじ）淡路町で新たに開業した五代自転車商会に移った。幸之助はこの店で満十五歳（以降、幸之助については満年齢）の年まで足かけ六年に及ぶ奉公生活を送っている。

この期間に学んだことについて幸之助は、「人生の基本に通ずることから、具体的な商売の進め方まで数限りなく、とても言いつくせる

ものではありません」[7]と述懐している。また当時は一般的に、船場で奉公して商売を見習うことは、商売人として一人前のコースをとることだという認識があったという。[8]さらに音吉夫人ふじは商家の女主人、いわゆる〝御寮人（ごりょん）さん〟として、幸之助の躾教育において重要な役割を果たしたと思われる。奉公人とその主人が共通の理解の下に長い月日を過ごしたことを考慮すれば、幸之助が音吉夫妻の名前を最大の恩人として筆頭にあげるのは当然のことであり、彼らが、浜口の掲げるレファレント・パーソンの属性すべてにあてはまり、幸之助にとって無比の存在であることは間違いないであろう。

五兵衛の存在

このように音吉夫妻が重要なレファレント・パーソンであることはいうまでもないが、本稿で音吉の兄である五兵衛を優先して取り上げるのは三つの理由による。

最初は、五兵衛と幸之助の父政楠との関係である。そもそも幸之助が小学校就学中にもかかわらず、学業を捨て、単身大阪に出ることになった背景には松下家の凋落がある。松下家は出身地の海草郡和佐村字千旦ノ木（現・和歌山市禰宜）では小地主の階級にあり、[9]幸之助の祖父房右衛門の頃が最も盛んで、隣の村へ行くのに他家の土を踏まずに行けたという。[10]それほどの家格を誇ったが、明治三十二（一八九九）年頃、幸之助の父政楠は当時和歌山県にも置かれた米穀取引所に通うようになり、結果的に米相場に失敗して家産を消失させることになる。その後、政楠は一家を伴って和歌山市内に転居し、下駄商を営むものの二年余しか続かず、さまざまな仕事に手を出したが、いずれもうまく運ばなかった。そして明治三十五（一九〇二）年、政楠は単身大阪に出る。出稼ぎで生計を立てようとしたのである。その大阪で得た職というのが、五兵衛が私財を投じて設立した創立間もない大阪盲唖院であった。[11]したがって、五兵衛は幸之助にとってみれば父の恩人ということになる。幸之助は、父政楠が己の不行跡によって家産を失ったことに対して終生贖罪の気持ちを抱いていたこと、その分自分に対する期待が大であったことを告白している。[12]またその一方で、政楠が大阪に出て少しは安定した基盤を得たにもかかわらず、少し生活に余裕が出ると再び相場に手を出していた姿を、痛ましく感じていた。[13]幸之助にとって政楠はまさしく悲劇の人であり、救われなければならない人物であったのではないだろうか。そして政楠が救われるために、幸之助は父に代わって自分は必ず成功しようという意志を固めたという。[14]

こうした父政楠との関係を考えると、政楠の苦境を救った五兵衛の存在は、幸之助にとって主人の兄としてではなく、父の恩人としての尊敬と信頼のほうが強かったと考えられる。

そして次に重要なのは、五兵衛自身の身体的ハンディである。五兵衛は十七歳（幸之助以外は史料にもとづき数え年で表記）の時に風眼によって失明している。[15]風眼とは膿漏眼の俗称で、医学的には急性化膿性結膜炎である。いかなる時代性を考慮しても、視覚障害者が社会で生計を立てていくのは至難である。しかし、五兵衛はハンディを背負いながら経済的成功を収め、なおかつ盲唖者のための学校を創立する

という事業を興した。社会起業家というにふさわしい業績であろう。

身体的ハンディについては幸之助にもあった。幸之助の家系は夭折が多く、幸之助のほか七人のきょうだいは、三人が二十歳未満で亡くなり、二十歳以上三十歳未満で三人が死去、最も長命だった一番上の姉でも四十六歳の寿命であった。死因はいずれも病死で、幸之助も例外ではなく、蒲柳の質で二十歳の頃に肺尖カタルで血痰を吐いた経験がある。[16]

社会生活における身体的ハンディは、生きる意志に影響すると考えられるし、実際、将来的な可能性をかなり限定することになろう。その意味で、五兵衛が遺した業績は、幸之助の大きな目標足りえたのではないだろうか。

三つめの理由は、五兵衛と音吉との関係である。長年、音吉に商売を指導したのは五兵衛であり、音吉にとっての直近のレファレント・パーソンもまた五兵衛であろう。もし、幸之助が音吉から商売や事業の根本を学んだとすれば、その原点は五兵衛の事業観・商売観から推察できるはずである。

Ⅱ　五兵衛の事績

喪われた視力と家業

五兵衛は嘉永元（一八四八）年、堀川の沼田藩蔵屋敷の米方三方を務める四代目播磨屋五兵衛の長男として生まれた。[17] 幼名は市松といった。米方三方とは播磨屋すなわち五代家の家督、家格を示す役柄で、蔵米の出入りの検査役・仲仕頭・仲買の三役を兼ねていることを意味し、五代家歴代はいずれもこの役と五兵衛の名を継承して、播磨屋五兵衛、通称「播五」と名乗った。

初代五兵衛が越前大野郡出身の商人で、越前から大阪の西天満に出てきて精米業を営み、鴻池、越後屋とも取引をし、大名の蔵屋敷にも出入りを許されて、この身代の基を築いたという。二代目五兵衛こと吾三郎は堂島の米相場で失敗し、家産を一時期逼塞させたが、養子に迎えた清二郎が三代目を名乗り、青物業で成功して身代を立て直した。五兵衛の父、四代目五兵衛は大和の国葛城の産で名を六三郎といい、若くして大阪天満に出ると青物の仲買業を営んでいたが、たまたま、住まいした南森町西念寺裏で五代家の三代目と親しくなった。そして実父の死を契機に、清二郎の婿養子となって播磨屋を継ぐことになった。

六三郎は嘉永六（一八五三）年、清二郎の死去にともなって家督を継承、四代目「播五」を名乗ったという。六三郎は堂島の米相場では相当の顔役となり、同時に先代も手がけていた青物店を営んだ上、妻のきく（市松の母）にも乾物商をさせるなど、五代家の隆盛に大きく貢献したようである。

少年時代の市松は、家の土間に積み上げられた何十俵という俵に上り下りして遊ぶなど、富裕な家にあって屈託なく成長し、しかも寺子屋における学習においては群を抜いていたという。とくに算盤の速さは父六三郎を驚かすほどであった。[18]

商家の跡取りとして順風満帆だった生活が一転するのは、文久三（一八六三）年の暮れからである。突如として目に疼痛が生じた。しかもこの疼痛は二人の弟、一人の妹にも伝染し、一家は戦慄した。その後、弟妹たちは回復したものの、市松に限ってはついに半年後の元治元（一八六四）年七月十七日に失明するに至る。市松の視力を奪った風眼（急性化膿性結膜炎）は、江戸時代から眼科医を悩ませる眼病だったという。[19] 明治十（一八七七）年にドイツ人ナイセルにより淋菌が主病原だと特定されたが、出生時処置（硝酸銀点眼など）が行われていなかった時代では、失明原因の一割を占めていた。[20]

この時期、社会の趨勢は幕末の激動期にあったが、五代家もまた長男市松の失明とともに、父六三郎が慶應二（一八六六）年頃から病床に伏すようになり、家運も下降していく。維新後の明治二（一八六九）年、六三郎は四十七歳で亡くなり、市松は五代目五兵衛となるが、五代家は早々に維新の影響を直接受けることとなった。

なぜならば、蔵屋敷の家禄が廃止され、また青物店もすでに廃業となっていて、市松こと五兵衛が相続したのは家財程度しかなかったからである。視力と家業の両方を喪った五兵衛の境遇はかなり厳しいものであったと察せられる。

一家の苦境と五兵衛の向上心

当時の家族構成は祖母みつ、母きく、五兵衛（二十二歳）、妹かめ（十六歳）、そして三人の弟清吉（十一歳）、福松（九歳）、音吉（四歳）の七人の大所帯であったが、それを盲人の身である五兵衛が家長として生活を支えなければならなかった。[21]

六三郎が亡くなる一年ほど前から、五兵衛は豊竹駒太夫に浄瑠璃を習い始めていたが、芸事で生活を支えるまでには至っていない。五兵衛は北野村へ出向き按摩の修業を始め、他の者は手内職に励んだ。

五兵衛は家財のめぼしい道具類を質に入れ、七〇円の資本を手にすると、三代目清二郎以来の家業でもあった青物商を再開しようとした。店舗はなくとも「播五」を復活させようと、弟の清吉に手引きをさせ、盲目の身でありながら行商の天秤棒を担いだ。しかし、それは人々の憐れを誘っただけで、商売としては失敗であった。七〇円の資本はちょうど三カ月間の食い扶持に消え、五代家はさらに窮迫した。

その時、かつての「播五」の商売を続けさせようと近隣の町家の人人が寄って頼母子講（たのもしこう）が立てられ、[22] その融資によって商売が二度まで救済された。[23] そして母きくと弟の清吉が行商に出るようにもなった。しかし、それでもわずかな商いや内職では生活が保てず、一家の口減らしのために妹のかめと末弟の音吉が奉公に出た。そうした苦境にありながら、さらに五兵衛は新事業を模索した。

一つは周旋屋である。日々按摩の仕事でほうぼう町家へ出入りし客の肩をもんでいると、世間話の中から思わぬ仕事の話を聞く。そうした情報を然るべき得意先に足を運んで話をまとめてやると、いくらかの収入を得ることができた。こうした周旋を按摩業の余業としてではなく、積極的な事業として始めようと考えるのである。

さらに、その頃、兎の愛玩が巷で流行りつつあると知ると、五兵衛は一〇円を工面し、一羽五円で白黒の番（つがい）を購入、清吉に飼育させた。

兎は順調に繁殖して、ひと番が一七円で売れるようになり、さらに資金を注ぎ込んで、兎の飼育を拡大させ兎市を開くまでにした。

このように六三郎が亡くなって四年ほどの間に、障害者ゆえの自立の困難を乗り越え、さらに資金不足を承知で新規事業に挑戦するところは、相当の企業家精神を有していたと考えられるのではないだろうか。

成功と失敗

とはいえ五兵衛の事業活動はその後も、紆余曲折を辿る。

まず軌道に乗った兎の飼育について、五兵衛はさらに積極的な手を打った。兎の流行が関西のみならず東京まで及んでいるとみると、時価八〇円に相当する兎を弟清吉に託し、販売に赴かせた。ところが、この清吉が販売に成功したもののその売上げを遊蕩に使い果たしてしまい、そのまま出奔してしまった。このことで兎の飼育事業は頓挫したものと思われる。

一方、自ら積極的に乗り出した周旋業については、とくに明治七（一八七四）年頃、家屋の売買が盛んになったことから大きな成功を見た。五代家の生活は初めて安定し、五兵衛はようやく家名の面目を立てられるようになったのである。

ここで五兵衛は老松町二丁目に時価五〇〇円の家屋を購入する。わずか二年前は、一〇円の工面にも人の手を借りていたところが、間口一五間、奥行一五間、借家一六戸と蔵が付いた屋敷を得るまでになったというのは相当な成功であったといえよう。[24]

五兵衛はこの新居で当時流行していた日歩頼母子会社を組織した。その貸借方法は、預り金に対しては月に一割五分の利子を払い、貸金には二割五分の利子を取るというものであったが、会社は至極順調に推移し、最盛期には預り金が一万円にのぼったという。

ところがこの成功が一つの法改正によって、暗転するのである。

明治八（一八七五）年二月、太政官令改正が発布され、その一項に借用証書は身代限りを以て終わりとするという条文があった。当時は差押さえの制度もなかったため、この改正令は債務者には有利なものとなった。支払いが困難になると、身代限りを切り札として返済を滞らせた。反対に預け主、債権者は押しかけて資金の回収をはかって譲るところがなかったために、五兵衛の頼母子会社は資金繰りが一気に苦境に陥った。

この事態に及んで、五兵衛はこの年七月二十五日の夜、天満川に入水自殺を試みた。しかし、通りかかった質屋片岡利兵衛に抱き止められ、命を救われたとある。利兵衛に、「生命冥加（みょうが）といふことがある」と諭され改心したと『五代五兵衛翁頌徳誌（しょうとく）』は記している。[25]

いずれにせよ、五兵衛の進退は自らのハンディによる困難に加え、維新期の政治経済の紊乱（ぶんらん）が大いに影響したといえよう。

復活のための事業

五兵衛は復活の意志を固めると、債権者に対しては自分の広大な家屋を月六七円の家賃で貸し付け、その家賃をそのまま債権者の返済に回すことにして、借家に移った。

こうしておいて、五兵衛が乗り出したのはまたしても、新事業であった。折しも湯屋業を営む家に嫁いでいた妹のかめが夫と死別して戻ってきた。すると五兵衛は明治九（一八七六）年二月に、三〇〇円を借り入れると、京町堀にあった金蔵湯という湯屋を一日八〇銭で借り受け、経験者のかめに経営を任せた。これが非常に繁盛した。この金蔵湯は湯銭の値上げが申し込まれたために、四カ月で明け渡すことになったと『五代五兵衛翁頌徳誌』にあるが、これは繁盛しているのを聞いた持ち主が、自ら営業することを思い立ったからではないかと想像される。この短期間で金蔵湯は二〇〇円の収益を上げたというが、おそらくかめと五兵衛は安い湯銭で多数の客を得たのであろう。

五兵衛はその半分の一〇〇円で天満紅梅町の紅梅湯と久宝寺の寶栄湯を買収、寶栄湯を改築して営業を拡大しようとした。ところがこの改築がまた大きな困難を伴った。五兵衛の企図した改築の規模は不明である。五兵衛は当初一九〇〇円の借金をして改築資金をそろえたものの、諸費用が嵩みその額を越えた。そのため工事を請け負った大工その他に対する四五〇円が支払い不能となり、訴訟を起こされる事態になった。五兵衛は弁護士を雇うこともできず、弟の音吉に手を引かせて裁判に臨んだという。加えて改築の上開業した寶栄湯は一日一〇円の売上げを見込んでいたが、実際は一日二円にすぎず、支払いに充てる余裕もなかった。

裁判で調停をみると、明治十（一八七七）年十月、五兵衛は内久宝寺町四丁目に移転する。巷ではちょうど同月に鹿児島で西郷隆盛が城山において自刃して西南の役が終結したことが報じられ、世相の落ち着きとともに五兵衛も心機一転周旋業に励むようになった。

湯屋業も先の兎の飼育と同様のちに頓挫するが、自ら手がけていた土地売買、金銭貸借の周旋業はつねに安定して高収入を保っていたようである。この実績は自らの事業の適性・将来性を見極めるのに充分な材料だったのであろう。この頃から五兵衛は周旋業を拡大し、同時に蓄財を心がけるようになったという。[26]

周旋業に自信を得た五兵衛は、周旋のみにとどまらず、自ら土地家屋を売買するようになった。手がけた地所は天神橋筋六丁目、築港、九条、玉造の新開地で、いずれも大きな成功を見た。明治十九（一八八六）年前後からの五年間で二〇万円の売上げを上げ、時には月に一万円の利益があった。[27] 五兵衛の実業はこの時点で頂点を極めたといえよう。

隠居と社会事業への目覚め

明治二十四（一八九一）年十一月十九日、五兵衛は四十四歳で隠居し、二十六歳の音吉に家督を譲った。むろんここでいう隠居とは戸主権のことであり、一切の事業から手を引くという意味ではない。五兵衛は周旋業にむしろ精を出すようになった。音吉は明治二十（一八八七）年の春、二十二歳になったのを契機に独立を志望し、五兵衛から二〇〇円の資本を得て、油と蝋燭の小売商を営んだものの失敗、続いて二軒の湯屋業を経営するがこれも廃業する。音吉は五兵衛からさらに資金を得て質屋を開業、ようやく地歩を固めた。

音吉よりも七歳年長の清吉が本来家督を継ぐはずであったが、かつ

て兎の飼育事業で東京へ出向き出奔した折にその資格を失ったといえる。清吉は五兵衛が日歩頼母子会社を始めた頃に帰郷したが、五兵衛から分家を言い渡されている。ところが、その後も定職を持とうとしなかったので、五兵衛は清吉にも湯屋を開業させ、所帯まで持たせた。しかし、それでも放蕩は収まらなかったという。清吉は明治二十三（一八九〇）年に三十二歳で病死するが、一族の厄介者であった清吉の人生に結末がついたことも、五兵衛が隠居を決断した背景としてあったのかもしれない。

ところで家長としての責任感や諸々の束縛から解かれて、五兵衛は仕事に没頭する多忙な日々を送っていたが、心情的に大きな変化が出てきたという。その内面を『五代五兵衛翁頌徳誌』は、次のように描写する。

> 最初は、自分の仕事に對する漠とした疑問として顯はれた。何の爲に、自分はかうして毎日齷齪と稼いでゐるのだらうか。尤も以前の自分は貧苦を相手に、その日その日を闘つて行くところに、働き甲斐があつた。その貧苦を完全に制壓して了つた今、單に物慾を滿足させるために、土地賣買や投機に狂奔してゐるだけで、それで好いのであらうか。[28]

『五代五兵衛翁頌徳誌』は五兵衛が隠居を決断する際、その後の生き方については充分な心の用意をしていなかったと説く。余生をどのような価値観によって意義づけ、過ごすべきか。[29] この葛藤に対して、五兵衛は自分が失明したことから生じた困難を思い起こし、盲唖教育に身を投じることを決める。

Ⅲ　私立大阪盲唖院の設立と経営

盲唖院設立まで

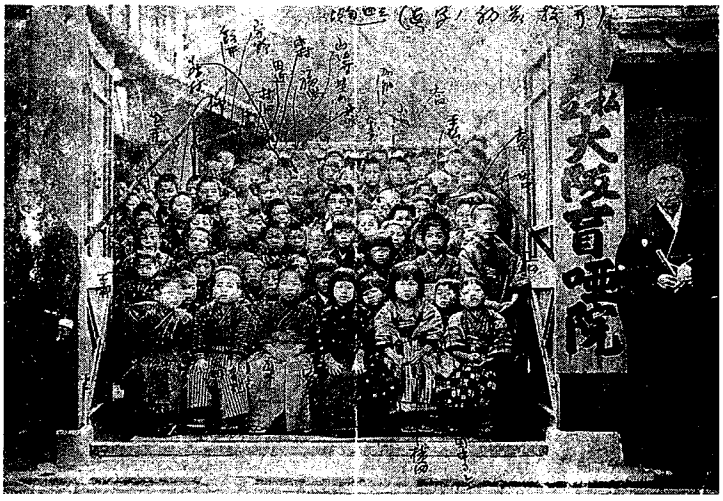
明治三十二（一八九九）年、五兵衛は六代目の音吉を伴って、京都盲唖院を見学する。目的は前院長古河太四郎[30]の講演を聴くことであった。古河は京都上京区の小学校教員であったが、日本で初めて聾唖教育を提唱し、独自の教育法を確立、わが国初の盲唖学校京都盲唖院の初代院長を務めた社会起業家の草分けであった。五兵衛は古河の講演を聴き、盲唖学校の設立を決意、盲唖院をつぶさに見学し、寄附金を置いて帰ったという。[31]

この時の古河の講演がどういうものであったのかは定かでないが、近代的な盲唖教育の必要性や、古河が考案した古河式盲唖教育法の一端の紹介であったと思われる。古河式盲唖教育は視覚障害者の聴感覚を育てるために体育を重視し、独自の遊戯や体操が開発され、また運動場にも打球聴音場といった装置を擁する科学的なものであった。[32] また当時の明治政府の盲唖教育体制がいかに整っていないかという事実も古河の口から語られたであろう。

政府による盲唖学校設立の建白書は明治四（一八七一）年に出されているが、その整備は容易に進展しなかった。[33] 最も早かった京都盲唖

院でさえ明治十二（一八七九）年であり、官立で設立されたものの経営困難にさらされていた。古河も初代院長として運営に苦慮したが、十年間にわたる教育内容その他での行政との軋轢、また個人的な金銭問題、健康問題などで消耗し、明治二十二（一八八九）年、院長を辞していた。

大阪における盲唖教育の歴史もまた同様で、明治十二（一八七九）年に府立師範学校内に模範盲唖学校が開設されたが、翌年廃校になる。その後篤志家により経営を継承されたが、二十二（一八八九）年に結局、経営困難に陥りそのまま閉校となっていた。明治二十九（一八九六）年に盲唖教育の必要性を問う調査も許可されたが、



写真②　明治34年、開校後、初めて撮った写真。右端に五兵衛、左端に古河太四郎が立っている。出典：『大阪市立聾学校六十五年史』

行政上具体化されることはなかった。五兵衛は最初の行動として大阪府、大阪市に盲唖教育の再開を運動したが、やはり成果を見ることができず、ついに私財を投じて学校を創立することを決意したわけである。

五兵衛と音吉は協力して案を設計し、明治三十三（一九〇〇）年二月十一日に、南区大宝寺町中町の真宗大谷派誓得寺内に、盲唖学校創立のための事務所を置いた。大阪府から認可が下り、事業の創設が私立大阪盲唖院という名称のもと公のものとなったのは、事務所創設から一カ月後の三月十九日であった。

五兵衛は京都盲唖院長の鳥居嘉三郎を招聘して、五月二十五日には本町四丁目の本願寺の末寺浄照坊で盲唖教育講演会を開き、盲唖教育の重要性を世間へ広めると同時に、創立事務所を北御堂の南向いに位置する浄久寺に移転した。七月十日には前年京都盲唖院で講演を聴いた盲唖教育の第一人者、古河太四郎に懇望して院長に迎えることに成功した。古河にとっても京都で失った場をこの大阪で復活する機会を得たわけである。こうして体制を整え、浄久寺を仮校舎として開校したのは九月十三日であった。教員は古河ともう一名と助手が一名。生徒数は聾唖生が二二名、盲生が三名、計二五名であった。盲唖院の正校舎が見つかり、再度移転するのは十一月のことであり、南区塩町一丁目一六番地のその地は、敷地一三九坪、校舎七八坪、寄宿舎一八坪で運動場もなかったという。[34]

盲唖院の機能と経営

『五代五兵衛翁頌徳誌』が強調するのは、この私立大阪盲唖院が単な

る教育機関の域を超えているという点である。なぜならば五兵衛が描いていた盲唖院の全事業においては図1に示すように、盲唖教育は一部にしかすぎなかったからである。そして、『五代五兵衛翁頌徳誌』は、五兵衛がその全事業実現のために阿倍野に三〇〇〇坪の敷地まで買収済みであったと記している。[35]

盲唖院の各事業を整理すると、盲唖学校は、盲部と聾唖部に分かれ、盲部は尋常科が国語・算術・講話・体操、技芸科は音楽・鍼灸・按摩を課した。聾唖部も二科に分かれ、尋常科は読方・習字・作文・算術・筆談・体操、技芸科に図画・彫刻・指物・裁縫を課している。

病院は、主に眼科・耳鼻咽喉科を置き、衛生相談、失明防止、失聴防止に関わる企図を積極的に実施しようとしたという。

授産場は、炭団（たどん）の製造、印刷部門があったというから、何らか事業を興すことを目的としていたのだろう。

有隣舎は、盲唖学校・病院・授産場の設立と維持のための費用を捻出するため、種々の商人・事業者・会社と特約を結んで、各商品の割引券をつくりこれを販売、その売上げを充てるというものであった。一枚二銭の有隣切符というものを考案し、大阪市内の有数の大商店と契約して、その有隣切符を持参した客には、契約した商店では二割引で売るという、現在でいうクーポン券の発想であった。これで五兵衛は、購買者は商品を安く求めることができ、契約店では客足が増え、盲唖院は経済的に潤うことになるから一挙三得になると考え、相当な自信のもとに、二、三万円の費用を投じ、何十万枚という有隣切符を発行して、宣伝にも努めたが、結果的には失敗に終わった。[36]

五兵衛としては、盲唖学校と有隣舎を軌道に乗せ、教育活動の安定と、経営的基盤を確立の上、病院、授産場を充実させていきたかったのであろう。しかし、いずれも厳しい経過を余儀なくされた。

有隣舎が失敗したとわかると、続いて五兵衛は賛成会を組織した。これは純粋な寄附機関で、盲唖教育に理解と関心と同情のある人々に直接支援と支持を訴えるものであった。会費は一口二銭、五〇口以上の会員に対しては協賛会というものを組織して、教務財務についても関与するいわば盲唖院のアドバイザーとしての役割を期待した。

また賛成会には別に救助部という部門を設けて、貧困な家庭の盲唖生を救助する仕事までつくった。救助部は生徒の家庭状態を厳密に調査し、五つの等級に分け、そのレベルに応じて食料・衣服・学用品を支給したという。[37] そのために五兵衛は年に一回米袋を各方面の有志者に配布し、慈善米と称する施しを募集した。

私立盲唖病院についても開設への具体的展望は険しかったが、五兵衛は眼科、耳鼻咽喉科それぞれの専門医の出張医療を乞うて、在学生

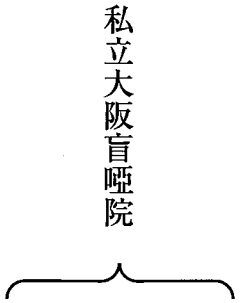


図1　五兵衛の事業構想

の診療や、一般外来患者の無料診察を施した。『五代五兵衛翁頌徳誌』は明治三十九（一九〇六）年三月二十四日の朝日新聞記事として、この当時、盲唖院が六つの眼科専門病院の協力を得て、十日間にわたって盲唖院内で貧困者を対象に診療を受けさせたとある。[38]

このように五兵衛は強いリーダーシップを発揮して自らの構想する事業の実現を模索していたといえよう。

優れた企画力

五兵衛が盲唖院の独立自営、また社会への理解のために絞った知恵は、これまで述べた施策以外にもある。

賛成会の拡張があまり思わしくないと知った五兵衛は慈恵箱を考え出した。これは神社・寺・旅館・劇場・鉄道停車場・汽船乗場・病院・役所・博物館といった大衆が集うところに、図2のような箱を置き、喜捨を求めるというものである。箱の中に喜捨が貯まるのを見計らって、盲唖院から事務員が派遣され、集金して院に持ち帰るというシステムだった。この慈恵箱は、明治三十六（一九〇三）年に大阪天王寺で開催されていた第五回内国勧業博覧会の会場内でも、広い範囲にわたって取り付けられていたとあり、五兵衛の広報意識が非常に敏感であったことを窺わせる。

図2　慈恵箱
出典：『五代五兵衛翁頌徳誌』

慈恵箱の優れた工夫は、箱の仕様にも凝らされており、そこには盲生が三味線を弾き、あるいは唖生が舞っている絵が描かれ、さらにはライオン歯磨、天狗煙草、津村順天堂といった企業の広告もあった。箱の製造費も各企業が負担していたといわれ、当時としては非常に斬新なものであった。慈恵箱は世に出た当初、好評を博し、集金も悪くなかったが、次第に飽きられ、また箱の盗難、破損によって衰えていったようである。

そのほか五兵衛は興行面でもさまざまな試みをしている。慈善音楽会（今でいうチャリティー・コンサート）もその一つである。とくに中之島公園地東公会堂で開催した慈善音楽諸芸大会は洋楽、清元狂言、舞踏、和楽に喜劇まで、当時の一流芸能人を招き、二日にわたる大きなイベントとして注目を浴びた。この音楽会では最後に盲生、聾唖生の謝辞と手話による合唱が行われ、来会者に大きな感動を与えたという。

盲唖院の移管

以上見てきたように、盲唖院の活動は五兵衛の情熱と実業人としての優れた実行力、企画力、そしてまた人脈の広さといった総合的な能力によって経営が維持されたといえよう。一方、教育の現場においては、五兵衛は院長を委ねた古河太四郎に対し、全幅の信頼を置き一切

を任せていた。[39] 自らが盲者であれば、いかに独自の教育法を開発したとはいえ、健常者である古河に一家言を呈しても不都合はなかったと思われるが、五兵衛は経営資金の調達や寄附募集活動のみに徹していた。

結果的に私立大阪盲唖院は、明治三十三（一九〇〇）年九月十三日から明治四十（一九〇七）年四月十八日に大阪市に移管するまで存続したが、この期間中の財政は五兵衛の私財に支えられていた。

	明治34（1901）	明治35（1902）	明治36（1903）	明治37（1904）	明治38（1905）	明治39（1906）
生徒数（人）	45～52	82～141	141～136	137	155	166～167
予算総額（円）	3,780	3,413	3,688	4,589	5,942	7,920
収入（円）	2,689	4,053	4,703	4,467	6,180	6,240
支出（円）	2,915	3,954	5,325	4,621	6,244	6,882
五兵衛による補填額（円）	▲226	（残額）99	▲622	▲154	▲64	▲642

表1　私立大阪盲唖院の決算状況：『五代五兵衛翁頌徳誌』103頁他より作成
▲は不足分であることを示す

創立時に三三三五円の支出を要したが、寄附で得た収入は八八五円。この時点で差額の二四五〇円をまず補填。また明治三十四（一九〇一）年から三十九（一九〇六）年にわたる年度会計については、表1のとおりである。これによれば、盲唖院の規模拡大は求められるものの、あれだけ五兵衛が知恵を絞っても、支出を収入で賄えたのはわずか一年のことであり、例年、結果的に五兵衛の私財から補填され経営されていた。明治三十二（一八九九）年の仮事務所設置以来、開業を経て、四十（一九〇七）年二月の移管まで八年間に五兵衛が投じた金額は総計四〇六九円にも上ったのである。

その後の運営については、陳情活動によって明治三十六（一九〇三）年に大阪市から初めて五〇〇円の奨励金を得ると、翌年も同額の支給を受けた。また時同じく古河太四郎がこれまでの盲唖教育の功績によって藍受褒章を受けたこともあって、盲唖院の社会的存在が認められ、生徒数も一〇〇人を優に超えるようになり、五兵衛としては念願の自立経営と、盲唖病院、授産場の実現に手ごたえを感じ始めていた。

ところが日露戦争の影響を受けて、寄附金が緊縮すると一気に盲唖院の経営は苦しくなった。文部省から一五〇円の寄附をみたが、それでも経営を持続させるには充分な額ではなかった。賛成会の会費は細り、慈恵箱の集金も激減した。西本願寺から一回三〇〇円の寄附を都合三回九〇〇円を得たが、やはり余裕を得たというわけではなかった。生徒数が増え私立盲唖院が充実すればするほど財政は逼迫する。そのジレンマから、いつか抜け出さなければならないという認識が、五兵衛と院長の古河にもいつしか出てきたのであろう。

結果的に五兵衛が盲唖院の経営を市に移管しようと決断したのがいつだったのかは明確ではない。おそらく明治三十七（一九〇四）年十一月に公立移管を申し出たという説が、一番近いと思われる。

五兵衛は大阪市役所学務課長・宮島茂次郎に話を持ちかけ、[40]翌三十八（一九〇五）年にも請願した。三十九（一九〇六）年七月に最後の公立引継願を提出し、翌四十（一九〇七）年に入って市長山下重威の採択をみて、[41]同年三月二十九日に市議会の承認を得、四月十八日に無償引継ぎがなされ、校名は「市立大阪盲唖学校」となった。この時、在校生一同は、五兵衛に純金盃を贈ったという。

五兵衛の決断がどのような理由に基づくものかについて『五代五兵衛翁頌徳誌』は、五兵衛の心境の変化を説く。すなわち、「自分の設計の半も實行出來なかつたが、盲唖學校が名實共に、立派に成長してくれた。自分は出來るだけのことは盡し來た。この上は、自分一個の事業ではない。公のものとして、より大きい發展を望まねばならない。經營資金に齷齪して、事業を却て、萎縮させるよりは、屑く、市に委ねて、この教育を廣く普及するのが、最善の方法ではないかと思つた」[42]という。五兵衛にとってはこの移管は、盲唖院が発展を見たから必要に迫られたわけであり、充実した思いがあったものと考えられる。

しかし、五兵衛は盲唖院を手放すと同時に、社会的な活動から手を引いたわけではなかった。時折、盲唖院を訪ねては、生徒を励まし、還暦を迎えてなお事業欲は旺盛であった。金銭貸借、土地家屋の売買・周旋に日々忙しく、人力車で市内を走り回るというのが、日常の姿となった。

社会起業家として五兵衛が最後に取り組んだのは、佛心講というものであった。これは貧困等の事情により、親やかけがえのない人、自分の死に際して葬儀ができない人に、篤志者を募り、その資金で篤志の僧侶をして弔いをさせるというもので、豊富な人脈を持ち、実業の金融で得た信頼を利用した、五兵衛ならではのものであった。五兵衛はこの佛心講の周知のためにビラをつくって宣伝したが、そのビラには賛助寺院として二八の寺院の名が記されている。

晩年の五兵衛は事業とこの佛心講に精力を注いだという。

五兵衛の死は甚だ唐突であった。大正二（一九一三）年九月初頭、知人である北浜の病院長宅に宿泊、翌朝、院長宅から電車道路を横切ろうとして、電車と接触、瀕死の重傷を受ける。直ちに病院に収容され手当が施されたが、九月十二日に死去した。

Ⅳ　同時代的考察

近代の盲人の生活基盤からの考察

前節まで五兵衛の事績と人生の経緯を見てきたが、五兵衛が盲人の身でありながら、経済的成功を収めたこと。その上、隠居をきっかけに盲唖教育に人生の意義を感じ、その他の福祉事業においても存分にアントレプレナーシップを発揮していった事実は五兵衛の器量の大きさと成功を示すのに充分である。[43]

ここで、五兵衛の評価の根本となる経済的成功は、同時代の視覚障害者すなわち盲人の人生としてどこが特異であったかという点を考えておこう。

盲人といえば、平家琵琶、平曲[44]を業とする琵琶法師が連想される

が、実際、平安朝に盲人が琵琶という楽器を得て、盲人の生活にも初めて自立への一大変革がもたらされたのは史実である。[45] 盲人らは平曲を基盤としてさらに芸能を発展させ、自治組織として座をつくった。当道座というものがそれで、当道座の存在は時代の推移とともに次第に盲人社会の秩序の基盤となった。室町時代に入ると、芸能の分野は琵琶のみならず三味線、そして箏曲へと広がり、また検校、別当、匂当、座頭といった盲人としての身分制度も確立された。[46] 徳川家康が幕府を開き、江戸時代の到来とともに当道座は盲人政策の根本に組み込まれ、さらに強固なものとなった。自治を認め、刑罰を含め盲人の行政は座の法によるものとされた。全国の盲人は当道座に加入するものとされ、税の免除もあり、また運上金を基とした金融業も認めた。[47] 芸能面での自立のみならず、鍼灸、按摩業を業とする者も増えた。福祉的な側面も整い、維新に至るまで、盲人社会は中世以来の当道座による秩序が凡そ保たれてきたわけである。このことはすなわち盲人が当道座を通じて、音楽芸能、医療面、高位者に限ってであったが、貸金業などによって生業を手にすることができたという意味で、たいへん重要である。[48]

そうしたシステムが近代化の波によって壊される。明治四（一八七一）年十一月三日、太政官布告「盲官廃止令」が出て当道座は廃止を命じられる。[49] しかも、政府は座に代わり得る盲人に対する教育保障・生活保障政策を実質何もとらなかった。したがって、盲人たちは新体制の社会で最も直接的に不利な影響を受けたといえる。五兵衛の失明時期はその意味でも不運であった。

元治元（一八六四）年、十七歳の五兵衛が失明ののち一番に始めたのが浄瑠璃修業であったことは、当道座の名残として自然な進退であったのであろう。また父の死後、明治三（一八七〇）年頃から按摩業の修業を始めるのもまた然りである。そうした矢先に、政府の当道座廃止の報を五兵衛がどのように受け止めたのかは『五代五兵衛翁頌徳誌』もふれておらず不明である。

このように盲人が社会的に一層不遇になる時代に遇って、五兵衛はなぜ成功できたのであろうか。

要因を順に挙げれば、最初は、苦しいなりにも存在した「播五」こと播磨屋の暖簾によるところの信用を軽視することはできないのではないだろうか。頼母子講による二度の援助はその証であり、資産状況の悪化にもかかわらず、資金調達を可能にしたのは家格と屋号に対する信頼があったからにほかならない。また五兵衛の個人的才覚は目が不自由になる以前から周囲に聞こえたものであったし、盲目になったことによる不憫さも援助を後押ししたと考えられる。

実業活動における五兵衛本人の資質を見ると、果敢な行動力も注目に値する。青物業をはじめ家業の持続に盲目となっても余念なく取り組んだこと。そして、また失敗を重ねたとはいえ、資力が乏しいにもかかわらず、兎の飼育業や湯屋業に対して積極的に事業を推進するところからは企業家精神の強さが窺える。先に述べたように五兵衛も自殺を試みたような過去があり、けっして常人離れした強靱な精神の持ち主とはいえないはずである。しかし、事業に乗り出すとなると少々のリスクを押して積極的に挑戦するほうを選択する。そうした決断力

の源泉がどこにあったのかは興味深いところである。

そして五兵衛の成功を確固たるものとしたのは周旋業である。周旋業成功の要因は、多量の情報を保有しその情報を求めに応じていかに連繋させるかによると思われるが、彼は盲人としては既存の仕事である按摩業に携わる中で顧客との自然な会話の中から情報を取得し、活用した。五兵衛の成功は、彼の記憶力、接客力といった個人の総合的な能力はもちろんとして、情報の価値をよく理解していたというセンスあってのことではないだろうか。

最後に、彼の手足となって働いた弟妹の貢献も大きい。次弟の清吉は先に述べたように彼を煩わせたが、のちに「六五」(ろくごこ)[50]と呼ばれる音吉とかめは文字通り五兵衛の手足として働いた。五兵衛の活動はその面では家内総出のファミリー・ビジネスであり、家名、暖簾とともに考慮すると五兵衛の成功は、本人の企業家的資質もさることながら、屋号の伝統が重視され、家父長の権限が保たれた社会と家の秩序あってこそのものであったともいえる。

仕事の種類	人　数	最高月収(円)	最低月収(円)	平均月収(円)
鍼按営業	24	5.0	0.6	1.8
訓盲教員	8	5.0	0.8	2.3
病院按摩手	7	6.7	1.7	3.7
琴師匠	7	5.0	3.0	3.8
その他※	21	—	—	—
合　計	67	—	—	—

※「その他」の内訳は、鍼按科専修7人、弾琴科温習2人、家務(専業主婦)2人、尋常科専修1人、病気1人、死亡4人、不詳4人

表2　視覚障害者の盲唖学校卒業後の動向(明治36年：東京盲唖学校)
出典：大隈三好著／生瀬克己補訂『盲人の生活』雄山閣出版、1998年、229頁

盲人の収入を比較するデータは少ないが、明治三十六(一九〇三)年に東京盲唖学校の卒業生の動向に関するものがある。[51]表2によると、視覚障害者の仕事は鍼按営業、訓盲教員、病院按摩手、琴師匠と従来からの盲人の生業に準じており、その収入は病院按摩手の六・七円が最高である。単純に換算すれば年収は約八〇円である。同業間格差の大きさも気になるが、どのように見積もっても年収一〇〇円を越えるとは考えられない。ちなみに同年、五兵衛は表1によれば盲唖院の赤字六二二円を私財で補塡している。私立盲唖院を賄った八年間で見ても年平均五〇八円を支出しており、その他生活資金等を考慮すれば、按摩手として優遇されている盲人より最低でも八倍、おそらく十数倍の財力は有していたに違いない。一盲人として社会的に成功した事実は同時代的感覚としても稀有のものだったといえよう。

私立大阪盲唖院の社会的評価

私立大阪盲唖院の同時代的な位置づけについてもふれておこう。視覚障害者として晴眼者にまさる経済的成功を遂げ、さらに事業で得た私財を投じて、行政府が及ばない福祉を行うという行為は美挙であることは間違いない。ただ、これも同時代的に、また全国的に、どのよ

うな位置づけにあったかを見ることも重要である。

たびたび古河太四郎の名を挙げているが、古河との関係なくして盲唖院が設立できなかったこともふまえておかなければならない。

日本における盲唖教育は京都上京区の待賢小学校教員であった古河が明治六（一八七三）年に、近隣の唖児二人が日々何を為すこともなく生活を送らざるをえないことに惻隠の情を覚え、個人的に教授を模索したのが最初だといわれる。[52] 古河は正式な教育体制を行政に求め、明治十一（一八七八）年五月京都府知事の許可が下りて、わが国初の官立盲唖学校として京都盲唖院が開設された。

古河の功績は独自の盲唖教育を開発したことにあり、その高い評価は「古川氏盲唖教育法」[53]として、大正二（一九一三）年文部省図書局から出版されている。また、彼の実践教育は明治天皇の天覧を仰ぎ、その功で酒餞料も贈られた。その後もイギリスのロンドン衛生教育博覧会から金牌を、米国ルイジアナ州博覧会より賞状を受ける等、国際的評価も得て、大阪盲唖院長時代には明治三十七（一九〇四）年に藍綬褒章、四十（一九〇七）年には文部省から一五〇円が下賜される。このように盲唖教育発案者として古河は五兵衛とは違った型の社会起業家であった。幼年時代に国学者や漢学者の指導を得るとともに、和算洋算を学ぶなど当時の最高の選良教育を受けた[54]古河と老舗商家の商人道を実学として学んだ五兵衛のコラボレーションがあって、教育内容は古河が、経営は五兵衛が受けもち成立したのが私立大阪盲唖院であったのである。

全国的な盲教育の成立を眺めると、京都に続き、明治十三（一八八〇）年には東京で外国人医師や宣教師の発案により楽善会訓盲院が設立されている。しかし、それが公立の東京盲唖学校になるのは七年後であった。大阪はその前年明治十二（一八七九）年に大阪府立模範聾唖学校が開設されたが、翌年廃校となってしまい、五兵衛の私立盲唖院の設立を待つことになるのは先述のとおりである。このように最も人口が多い三都でも、盲学校の成立は順調ではなかった。

全国各地に盲学校が開設されるようになるのは明治期後半にかけてであるが、その実態は公教育ではなく、多くが慈善家・篤志家による慈善事業または社会事業であり、そのため各地の私立学校の実情は、創立者の犠牲的奉仕による経営のため、永続きせず消滅したものも少なくなかったという。[55] 明治期に設立された盲教育機関は講習所を含めると七〇箇所に上り、大正末期には八六に達した。しかし、その中で当初から公立で始められたものは五、六箇所にすぎなかった。[56]『日本盲人史考』を著した森納は、この事実は、盲人が近代社会の中で生活できるかという問題が、盲人あるいは篤志家らに必然的に認識されるところとなり、公的施設の整備に先行して各地において教育のあり方が問われたことによる現象であり、「盲人教育が、盲人の救済・福祉にあるとはいえ、盲人自体の願望であり要求であった」[57]と指摘している。とすれば五兵衛は盲教育の先頭に立った盲人の代表であり、篤志家としても代表的な人物の一人だった。各地の私立盲学校の設立年次からいえば、五兵衛の私立大阪盲唖院は突出して早かったと位置づけられない。しかし、古河の院長登用による教育内容の充実、規模の大きさを考えると、先進的地位にあったといえる。[58]

V　レファレント・パーソンとしての検証

社会起業家としての特徴と人間性

以上見てきたように、五兵衛は実業家、社会起業家として大きな成果を収めた人物であった。ところで、本稿では五兵衛を今でいう「社会起業家」として評価してきた。社会起業家は、「社会の課題を、事業により解決する人」[59]、あるいは「医療、福祉、教育、環境、文化などの社会サービスを事業として行う人」[60]と定義されるが、五兵衛はその資格に恥じない足跡を残しているといえよう。

またイギリスのシンクタンク、デモスの報告書によれば、成功する社会起業家に共通する資質として、①リーダーシップがあること、②ストーリー・テラーである（説得力がある）こと、③「人」のマネジメントができること、④理想家であり、オポチュニスト（ご都合主義者）であること、⑤アライアンス（同盟）の構築者であること、の五つを挙げている[61]。

①③⑤は当然のこととして、②は下野していた古河を院長に招いた行動力からも察せられるし、④のオポチュニストぶりは、慈恵箱の設置、佛心講の発想にも表れている。この点からも社会起業家としての資質は充分備えていたのではないか。

『五代五兵衛翁頌徳誌（別冊）』における、人々の人間五兵衛評を列挙してみると、弟音吉は「うちの兄貴は眼から鼻へ抜けるやうな男だつた。とてもえらい人物だつた。あの男に眼があいてゐたらどんな事を仕出かしたかわからない」[62]と述べ、点字大阪毎日主筆中村京太郎は、「五代さんといへば大阪の一盲人實業家、陽のかん〳〵照る日でも高い足駄を履いて大男に曳かせた自用車にをさまつて、日々堂島の取引所に通つてゐる人と許り、東京で筆者は聞いてゐた。大阪に來て始めて知つた自分の認識不足、それから翁の盲教育に對する隠れた貢献であつた」[63]と書いている。

盲唖院を経営していた頃の五兵衛の日常は、当時の盲唖生の証言によると、「毎朝早くから腕車で出掛けられ夕刻五時か六時頃歸つて來られるので私等は殆ど緩りとお話を伺ふ様な機會は有りませんでした。翁は道樂として以前はよく淨瑠璃を語られたと聞いて居りましたが一度も聞かせてもらつた事は有りません。勿論御多忙で豫習をなされる様な暇もなかつたからでせう」[64]とあり、外にあっては資金集めのために市内を駆け回り、盲唖院においては深夜まで一室にこもって書記や近親者を相手に事務の整理をするか、独り沈思黙考して院の将来のための企画を立てるのが日課であった[65]。

また、いかにも苦労人らしいのが仕事から解放されている時の過ごし方で、酒も煙草もやらないこともあって、何か役に立つことをと鰹節をかいていることが多く、その音で院生らは院主の在宅を知ったという。以上のような証言からも有徳の努力家であった五兵衛の人となりが推測される。

幸之助自身も、著書『折々の記』で五兵衛の仕事ぶりについて、「驚くべきことに五兵衛さんは、全盲でありながら、家の売買周旋にあたって一度その家へ入れば、その家の古さや値打ちがはっきりわか

った」[66]と述べており、修練によってここまで鋭いカンを養った五兵衛の偉大さを証言している。

幼い幸之助がその異能ぶりを肌で感じていたという点でも、レファレント・パーソンとしての資格を有していたといえよう。

父政楠とレファレント・グループ

さて、五兵衛が幸之助にとってのレファレント・パーソンとなる縁を得たのは、父政楠の存在による。政楠に関する情報はきわめて少ないが、『五代五兵衛翁頌徳誌』から若干の消息が窺い知れる。

政楠は、私立大阪盲唖院が開院した二年後の明治三十五（一九〇二）年七月に和歌山から来阪、事務員、主に書記、会計としての職を得ている。『五代五兵衛翁頌徳誌』の職員名簿の写真に院長古河らとともに政楠の名が見える。

また五兵衛が企画、各地に配置した慈恵箱の集金に政楠も従事したとある一方、[67]院生の証言の中に、「其當時（明治三十七八年の頃）五代様の書記をして居られた紀州訛りの松下と言ふ人が居ましたが

写真③　職員名簿　出典：『五代五兵衛翁頌徳誌』79頁

写真④　明治38年、第一回卒業生の記念写真。最後列左から3人目が五兵衛、その右どなりが古河。この写真の中に幸之助の父政楠が含まれている可能性がある。　写真提供：大阪市立聾学校

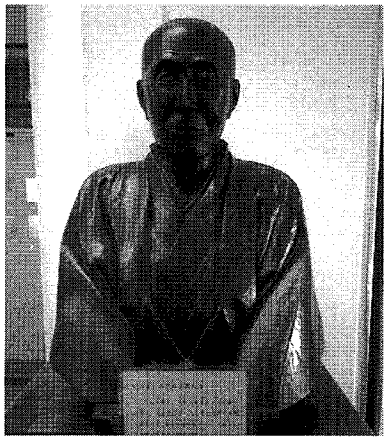
私等は此人によく世話になつたものです」[68]というものもあることから、政楠が盲唖院の中のさまざまな仕事にも積極的に関与し、信頼を得ていたことがわかる。

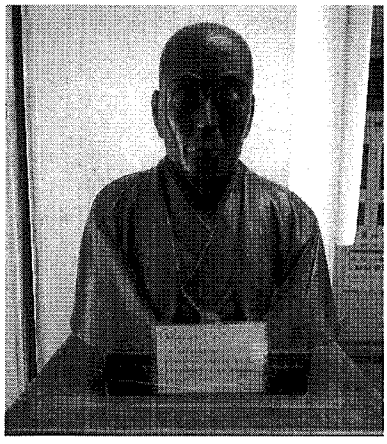
元々、書記会計という役割であったが、政楠はいつの間にか秘書役を務めた。また〝懐刀になつてゐた〟という表現もある。[69]明治二十二（一八八九）年に政楠は和佐村の第一期村会議員に選ばれていた過去がある。したがって、教養においても申し分なく、盲唖院経営についても補佐しうる総合的な能力の持ち主であったのであろう。先に述べた深夜まで五兵衛の仕事を手伝っていた書記というのは政楠だったのである。

政楠は明治三十九（一九〇六）年九月に脚気衝心（かっけしょうしん）によって五十一歳にて急逝する。ほぼ同時期、五兵衛の妹かめも病死している。『五代五兵衛翁頌徳誌』は、この二人の死が五兵衛を落胆させ盲唖院存続を大阪市に委ねる決断の発端になっているように記している。

政楠の葬儀等がどのような形で行われ、当時の盲唖院がどのように関与したかは不明である。また、五兵衛が慈父を喪い遺族となった幸之助に、どんな言葉を投げかけたのかも想像するしかない。そうした接点を繋ぎながら考えれば、幸之助が五兵衛から受けた影響は父政楠の介在、自転車店主人音吉との直接的関係、さらには、本稿で紹介した古河太四郎といった五兵衛とは違ったタイプの社会起業家との間接的関係等も考慮すれば、幸之助にはレファレント・パーソンならぬ大阪盲唖院をめぐるレファレント・グループが存在したといえるかもしれない。

ことに『五代五兵衛翁頌徳誌』における著述は、五兵衛、音吉の関係が商売における師弟であると同時に、盲唖院の共同設立者として非常に強い絆で結ばれていたことを示している。また現在でも実際に両者の強い結びつきを証明するものが見られる。筆者が取材に訪れた大阪盲唖院の伝統を継ぐ大阪市立聾学校には、玄関ホールの左右に五兵衛、音吉の胸像が向かい合わせに端座している。同校の校長室に古河太四郎の胸像があり、近代大阪の障害者教育の発祥に三人が相互に関わっていたことは大きな発見であった。





写真⑤（上）五兵衛像、写真⑥（下）音吉像
場所：大阪市立聾学校玄関ホール

幸之助に対する直接の教え

幸之助が音吉の営む五代自転車商会に奉公に入るのは、明治三十八

（一九〇五）年二月のことである。

幸之助は五兵衛が音吉の家を訪ねてきた時には、帰りに手を引いて送るという役目をしたと回想している。その道すがら、五兵衛からたくさんの話を聞いたという。『折々の記』を引用する。

「あんた、今度来た小僧か」
「へい、そうです」
「なんという名や」
「幸吉と申します」
「まだ子どもやな。そやけど、しっかり勉強せなあかんで」

というようなことから始まって、ご自分の苦心談などをそれとなく話してくれました。それをぼくは、子ども心に尊敬の念を覚えつつ聞いていたわけですが、そのころはただ何気なく聞いていた話でも、あとになってみて「ほんとうにその通りだな」と感じたことが実に数多くありました。

そのなかでも、とくに強く感じたことの一つは、やはり何をするのでも、結局は誠実な熱意がものをいうということです。

お互いの仕事でも何でも、それに臨む心がまえとして大事なことはいろいろありましょうが、いちばん肝心なのは、やはり誠意あふれる熱意だと思います。知識も大事、才能も大事であるには違いありませんが、それらは、なければどうしても仕事ができないというものではありません。たとえ知識が乏しく才能が十分でなくても、なんとかしてこの仕事をやり遂げよう、なんとしてでもこの仕事をやり遂げたい、そういう誠実な熱意にあふれていたならば、そこから必ずいい仕事が生まれてきます。その人自身の手によって直接できなくても、その人の誠実な熱意が目に見えない力となって、自然に周囲の人を引きつけます。目には見えない磁石の力が、自然に鉄を引きつけるように、誠実な熱意は、思わぬ加勢を引き寄せ、事が成就するということが多いと思うのです。

これはお互いが人生を生き抜くうえにもあてはまることで、これを文字通り身をもって実践されたのが、五代五兵衛さんだった。そうぼくは思うのです。

五兵衛さんが活躍された時代は、今から八十年以上も前の明治二、三十年代、目の見えない方が生きていく環境としては、今日よりはるかにむずかしいものがあったと思います。そうしたなかで五兵衛さんは、多くの弟妹を養い、ふつうの人でもむずかしい口入（くにゅう）の仕事を成功させ、さらには当時としてはきわめて少なかった私立の盲唖院を設立するということまでしておられる。そのために五兵衛さんが払われた熱意なり努力なりというものは、ほんとうは話を聞いただけでわかるというようなものではなく、ご自身の全身全霊を込めた命がけのものであったのではないでしょうか。そうした誠実な熱意が、周囲の人びとに通じて、むずかしい環境のなかでも道がひらけたのだと思います。

ぼく自身も、これまでの人生において、さまざまな困難にいくたびも直面してきましたが、その都度、ぼくの意識のなかには〝五兵衛さんにくらべれば、まだずっと恵まれている。もっともっと努力しなけ

れば……〟といったことがあって、それがぼくを支える大きな力になっていたような気がします。[20]

この述懐からは幸之助が五兵衛に対して、人生の機微を学んだというだけでなく、ビジネスの師としても非常に大きな存在であったという尊敬の念が伝わってくる。

こうした幸之助の感受性を考えると、レファレント・パーソン論について、浜口は影響を与える役割を六つ挙げていたが、表面上の機能的役割ではなくより深層的なレベルの役割、すなわち人間としての価値観、経営哲学の形成という意味で考察することも必要ではないだろうか。幸之助が五兵衛からどのようなことを学び、人生や仕事の糧としたかを想像すると、人が人から影響を受けるということは物理的、機能的な影響ではなく、哲学的なもの、価値観の継承という面こそ重要な役割であったのではないかと考えられる。無論それには、伝える側のレベルと受け取る側のセンスの一致が求められるであろうが。

おわりに

本稿は幸之助自身も認める五兵衛の人となりを、最大の事業であった私立大阪盲唖院設立の経緯をふまえて確認し、その影響の大きさを類推した。

今後の課題であるが、幸之助の直近のレファレント・パーソンはやはり五兵衛の弟音吉である。この音吉が五兵衛の影響をどのように受け、また実際に当時としては新事業であった自転車店をどのように経営していたのかということは、少年期の幸之助が直接ビジネスを学んだ現場としても重要である。五兵衛というバックグラウンドがあったことをふまえつつ、音吉の業績を検証しながら、幸之助に対するレファレント・パーソンとしての役割を検討したい。

【注】

(1) 浜口恵俊『日本人にとってキャリアとは――人脈のなかの履歴』日本経済新聞社、一九七九年、二頁。

(2) 同前、三三頁。この論点を発展させ、浜口は昭和五十七（一九八二）年に『間人主義の社会　日本』（東経選書）を著し、その年のサントリー学芸賞を受賞した。

(3) 同前、七頁。

(4) 同前、三〇―三一頁。

(5) 松下幸之助『折々の記――人生で出会った人たち』ＰＨＰ研究所、一九八三年。

(6) 同前、二頁。

(7) 同前、一七頁。

(8) 同前、一〇頁。但しこれは幸之助の個人的な同時代感覚で、船場の商人文化が江戸期から明治期末までどこまで継承されていたかは、経済史家の課題として容易に結論づけてはならないと思われる。

(9) 松下幸之助『私の行き方 考え方――わが半生の記録』ＰＨＰ文庫、一九八六年、一四頁。

(10) 佐藤悌二郎『松下幸之助 成功への軌跡――その経営哲学の源流と形成過程を辿る』ＰＨＰ研究所、一九九七年、二六頁。

(11) 前掲『私の行き方 考え方――わが半生の記録』一七頁。福島彦

次郎編『五代五兵衛翁頌徳誌』五代五兵衛翁頌徳会、一九三七年によれば、大阪盲唖院の設立は明治三十三（一九〇〇）年九月であり、政楠の就業は正式には創立二周年を迎える直前である。

（12）前掲『折々の記――人生で出会った人たち』一八五―一八六頁。

（13）前掲『私の行き方 考え方――わが半生の記録』三三―三四頁。「子供心にも特に私の胸を打ったものは、父が、してはならぬ相場に手を出し、先祖伝来の家産をつかい果たして、家族にも先祖にもすまぬと思う心を持ちながらも、母と時々争うてまで、この不名誉挽回のつもりであろう、少し手に小金ができると、そのわずかばかりを元にして死ぬきわまで相場を続けていたことである。ことの当否は別として、父のこうした姿は、子供ながらも非常に痛まれてならなかった。」

（14）前掲『私の行き方 考え方――わが半生の記録』三四頁。「私はこうした父の姿を思い浮かべるたびに、また多少村で知られていた父や家名のことを考えて、父の鞭撻の言葉を思い浮かべるたびにしっかりやらねばならぬ、と考えたものである。」

（15）前掲『五代五兵衛翁頌徳誌』一六七頁。以下、五兵衛の人生を俯瞰する資料はこの『五代五兵衛翁頌徳誌』と『五代五兵衛翁頌徳誌（別冊）』五代五兵衛翁頌徳会、一九三七年、が中心になる。

（16）松下幸之助『仕事の夢 暮しの夢――成功を生む事業観』ＰＨＰ文庫、一九八六年、五五頁。また松下幸之助『松下政経塾 塾長講話録』ＰＨＰ研究所、一九八一年、七〇頁等、血痰を吐いた事実についてはいくつか著書に記し、取材時に語ったりもしているが、状況が微妙に違う場合がある。〝蒲柳の質〟という表現は、幸之助自ら自分の健康を評する時によく用いていた。

（17）前掲『五代五兵衛翁頌徳誌』八頁。

（18）同前、一七頁。

（19）森納『日本盲人史考――視力障害者の歴史と伝承・金属と片眼神』米子今井書店、一九九三年、二七九頁。

（20）同前、二七九頁。

（21）福松は六三郎が死去して半年後、明治三（一八六七）年一月二十日に疱瘡で亡くなる。

（22）頼母子講とは無尽、無尽講ともいわれる互助的な金融組合。組合員が一定の掛金をなし、一定の期日に抽籤または入札によって所定の金額を順次組合員に融通する組織で、鎌倉時代から行われている。

（23）前掲『五代五兵衛翁頌徳誌』四二―四四頁。一度、頼母子講の融資を得て商売を続けるが、引き札役の三田屋が破産、その賠償を講元である五代家が負うことになり破綻寸前となるものの、再度、頼母子講が立てられ、商売が続けられるようになったとある。

（24）同前、五四頁。

（25）同前、六四頁。

（26）同前、七〇頁。「五兵衛は内久宝寺町に移ってからも、土地売買、金銭貸借の周旋業を続けて、一家の生活を潤沢にした。そして、かうして働いてゐるうちに、興味と自信とを得て、常に苦しめられて来た『金』を、今はそれをひたすら、蓄積することに努めた。」

（27）同前、七四頁。

（28）同前、八〇頁。

（29）功成り名を遂げた実業家の一つの岐路として、資産の始末を問われることは洋の東西を問わないといえる。たとえば、アメリカの鉄鋼王アンドリュー・カーネギーも必要以上の財を積むことに疑問を感じて、社会事業に乗り出した。「もう世俗的な富を集積するのに終止符をうって、それよりももっと真剣な、またもっと困難な仕事である賢明な分配に専心する決意をしたのである。」（アンドリュー・カーネギー著／坂西志保訳『カーネギー自伝』中公文庫、二〇〇二年、二六六頁）。

(30) 古河太四郎は資料により古川とも記されているが、古河の研究者・岡本稲丸の表記に従ってここでは古河としておく。またこの時古河はすでに京都盲唖院長を辞していた。

(31) 前掲『五代五兵衛翁頌徳誌』八三頁。

(32) この教育法は、渡辺平之甫編『古川氏盲唖教育法』文部省図書局、一九一三年として刊行されている。中川一彦「古川太四郎の体育観に関する一考察」『筑波大学体育科学系紀要二七』二〇〇四年にもくわしい。

(33) 政府が中世から続く盲人らの自治組織である当道座を廃止したのは、維新によって身分制度が崩壊し、弱者である盲人らに対する保護さえ不公平感を持たれて解消せざるを得なくなったからである。

(34) 『みみより情報　No.546』大阪市立聾学校聴能研究班、二〇〇〇年十月二日刊。

(35) 前掲『五代五兵衛翁頌徳誌』九〇頁。

(36) 同前、九六―九七頁。

(37) 同前、九八頁。

(38) 同前、九九頁。

(39) 同前、一〇八頁。

(40) 『大阪市立聾学校六十五年史』大阪市立聾学校、一九六六年、一六頁。

(41) 前掲『五代五兵衛翁頌徳誌』一一八頁。

(42) 同前、一一七―一一八頁。

(43) 『五代五兵衛翁頌徳誌』は故人の遺徳を偲ぶ目的であるから、多分の誇張が心配されるが、五兵衛二十五年忌の記念出版で、編集兼発行人は盲唖院の第二回卒業生であり、五兵衛の在世時を知っている。また別冊編集後記によれば、編纂者同人は六代目五兵衛こと音吉に綿密な取材を行い、かつ新聞社、図書館等で事実確認の上、成立させた旨が明かされている。前掲『五代五兵衛翁頌徳誌（別冊）』二九―三〇頁。

(44) 『平家物語』を琵琶の演奏に合わせて語る音楽をいう。

(45) 大隈三好著／生瀬克己補訂『盲人の生活』雄山閣出版、一九九八年、五五頁。

(46) 各階層は細分化され、七三もの官位があった。

(47) こうした事実は、寛政六（一七九四）年に書かれた当道関係の基礎資料『当道大記録』に記録されている。

(48) 生瀬克己「補章　近現代の〈視覚障害者〉をめぐって」前掲『盲人の生活』二二一頁。

(49) 文面は以下のとおり。
「盲人ノ官職自今被廃候事
但シ従前検校勾当座頭以下配当金取集メハ勿論各持場ヲ区分シ針治按摩等他ノ営業ヲ妨ゲ候儀今後急度被差停候条是迄来往居留ノ盲人銘々家業勝手ニ相営セ復籍入籍等其者ノ望ミニ任セ各地方官ニ於テ寛裕ニ可取扱候事」

(50) 六代目の五兵衛という意味で「六五」「六五翁」とも。ちなみに五代五兵衛翁は「五五翁」と関係者では呼ばれた。『五代五兵衛翁頌徳誌』の編纂同人は、六五に「五五翁を聴くの会」を開催して、五兵衛の情報を収集したと『五代五兵衛翁頌徳誌（別冊）』三〇頁にある。

(51) 前掲『盲人の生活』二二九頁。

(52) 『創立貮拾五年記念京都市立盲唖院一覧』によれば明治八（一八七五）年という説もある。

(53) 古河の姓は自筆原稿等も含め「古河」だが、戸籍上は「古川」であり、史料上でも注意が必要である。

(54) 町田洋次『社会起業家――「よい社会」をつくる人たち』ＰＨＰ新書、二〇〇〇年、一八四頁。

(55) 前掲『日本盲人史考――視力障害者の歴史と伝承・金属と片眼神』一八四頁。
(56) 同前、一九七頁。
(57) 同前、一九八頁。
(58) 現在の大阪市立聾学校校長吉田敏朗氏によると、古河以降の院長、特に第六代校長高橋潔は現在の手話法を堅持・発展させた聾教育者として非常に高名であり、第七代校長大曽根源助は現在使用されている指文字（指で示す五十音）の考案者であり、大阪の聾教育における先駆的地位を継続していたという。
(59) ウィキペディア参照。
(60) 前掲『社会起業家――「よい社会」をつくる人たち』一八頁。
(61) 同前、三九頁。
(62) 前掲『五代五兵衛翁頌徳誌（別冊）』二頁。
(63) 同前、五頁。
(64) 同前、八―九頁。
(65) 同前、七頁。
(66) 前掲『折々の記――人生で出会った人たち』二〇頁。
(67) 前掲『五代五兵衛翁頌徳誌』一〇一頁。
(68) 前掲『五代五兵衛翁頌徳誌（別冊）』九―一〇頁。
(69) 前掲『五代五兵衛翁頌徳誌』一〇一頁、一二二頁。
(70) 前掲『折々の記――人生で出会った人たち』二二―二五頁。

＊本稿のテーマについては、京都大学経営管理大学院の日置弘一郎教授の示唆に大きなヒントを得た。厚く御礼申し上げる。

（わたなべ・ゆうすけ　ＰＨＰ総合研究所経営理念研究本部松下理念研究部主任研究員）